

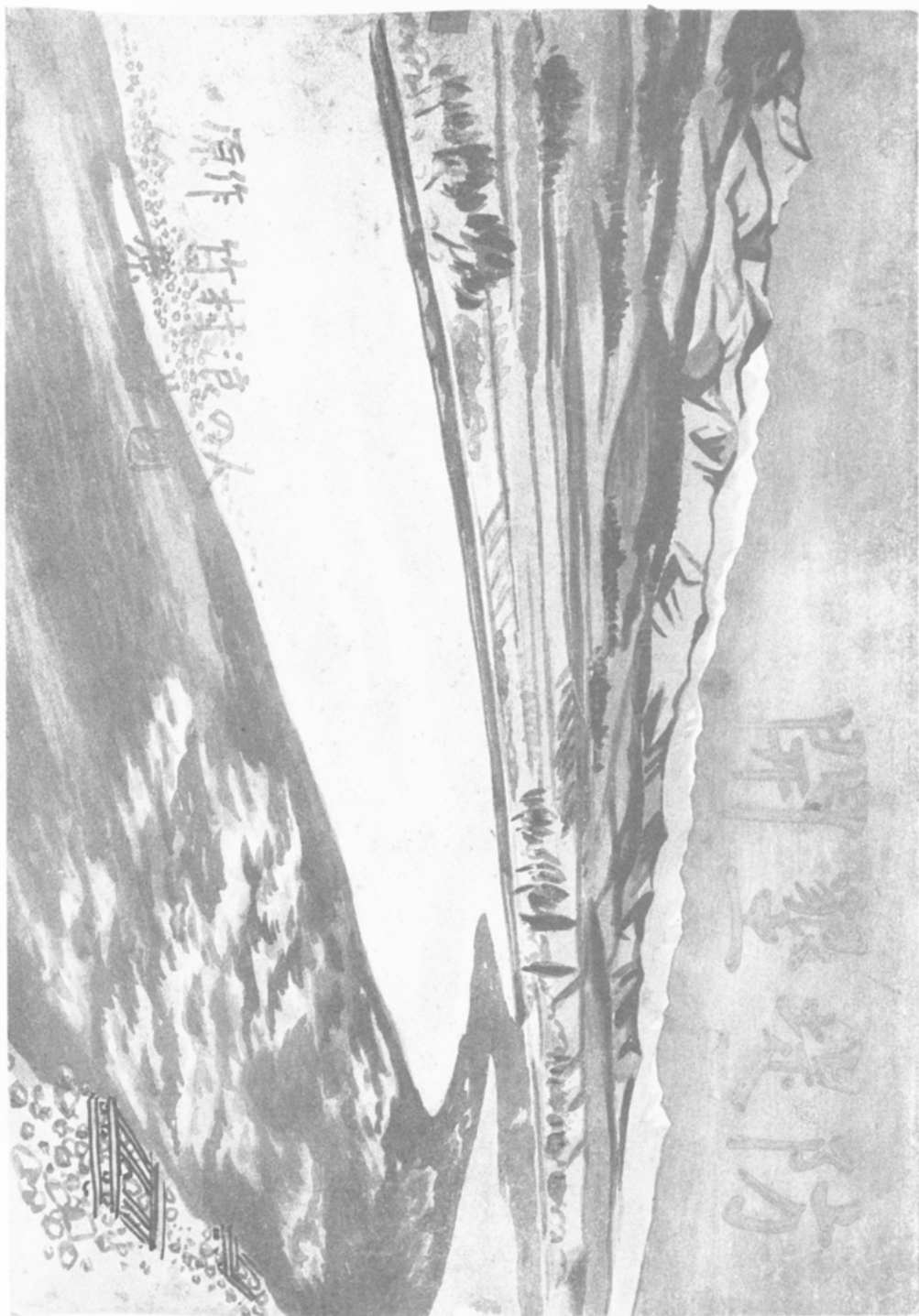
紙芝居
開墾堤防

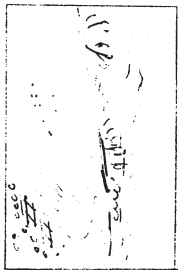
竹村浪の人

原守國 絵

防樂聖附

浪の村竹作原





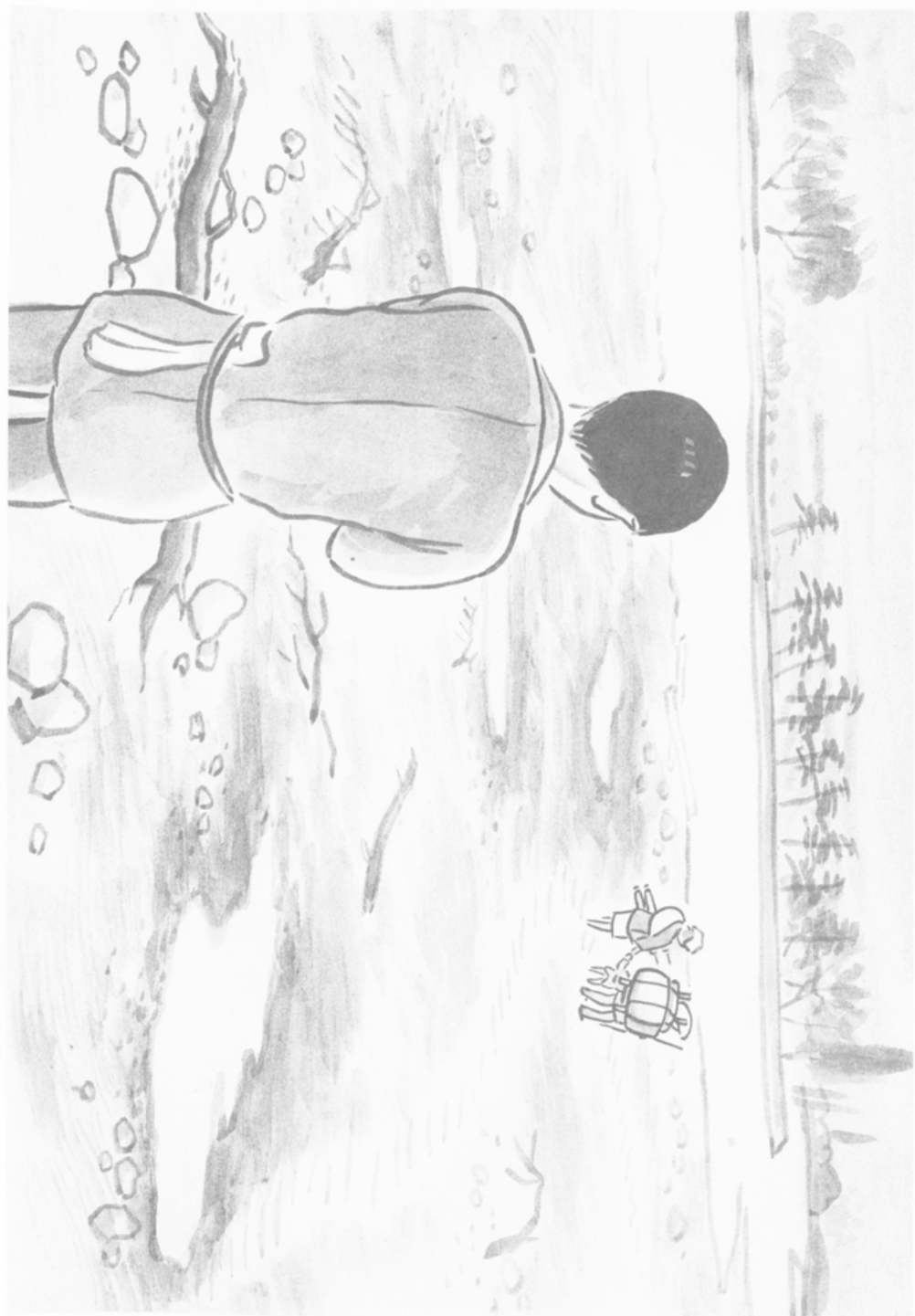
神稻村伴野は。右東伴野の庄と呼ばれ文化の中心地であり。又産米の主要地として。美濃高須藩の管下に置かれていた。

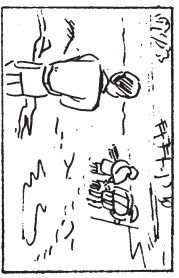
東は魁倉山に「つらなるゆるやかな傾斜地に。緑濃き肥沃の畑地を抱き。西は天龍川を挟んで、宇田村の翠緑と相対し。農耕に

いそむ人々を豊かに自然の恩恵を感謝していたが。天の仰りと昔呼ばれた天竜川の激流は。しばしば二の御用米地と称せられる。美田甲十町歩を荒らし。其度毎に里人等に悲歎の涙を流

こした。

宝暦三年。飯田城主堀親長は。領地の宇田村出崎原の川岸に。中村惣兵卫を。者に命じて。堅固な水除堤防を築かしたので。其の水勢のおおきを喰うた伴野は。年々水禍が増大し。中にも幕延元年申午の大洪水には。致命的の被害を蒙り。一七〇七明治元年戊辰の大出水には。再び立ち能げ。被害を被った。





住民達は荒果^{マカ}た河原に立つて。対岸惣兵五堤防を眺め^{弱ク}。あれが出来てから俺達は。こんな非道^{マカ}、目にあわせられ。いらぬい堤防^{マカ}と恨々の涙を落す

のみで。どうにもなまなかつた。回

「もいんち土に任^{マカ}めな、何所かへ行^{マカ}」と

先祖傳來の土地を捨て地圍へ移住するか。さな

とば田畑を離れた。水魔^{マカ}、襲わぬ山手へ移るか。

最後場面へ追来^{マカ}た。

遠く賣木^{マカ}の山中へ彼夫と分て行く者。或は

更に遠く下野那須原^{マカ}へ裸貫^{マカ}て逃げてゆ。者な

どを續出して。昨日は三人。今日は三人と村を捨てて

行った。



二の悲愴なる有様を見て。奮然^スと村の
 湯め人麿の幸福のために立つたのは、伊野
 の名家松尾家の者主。千振氏であった。

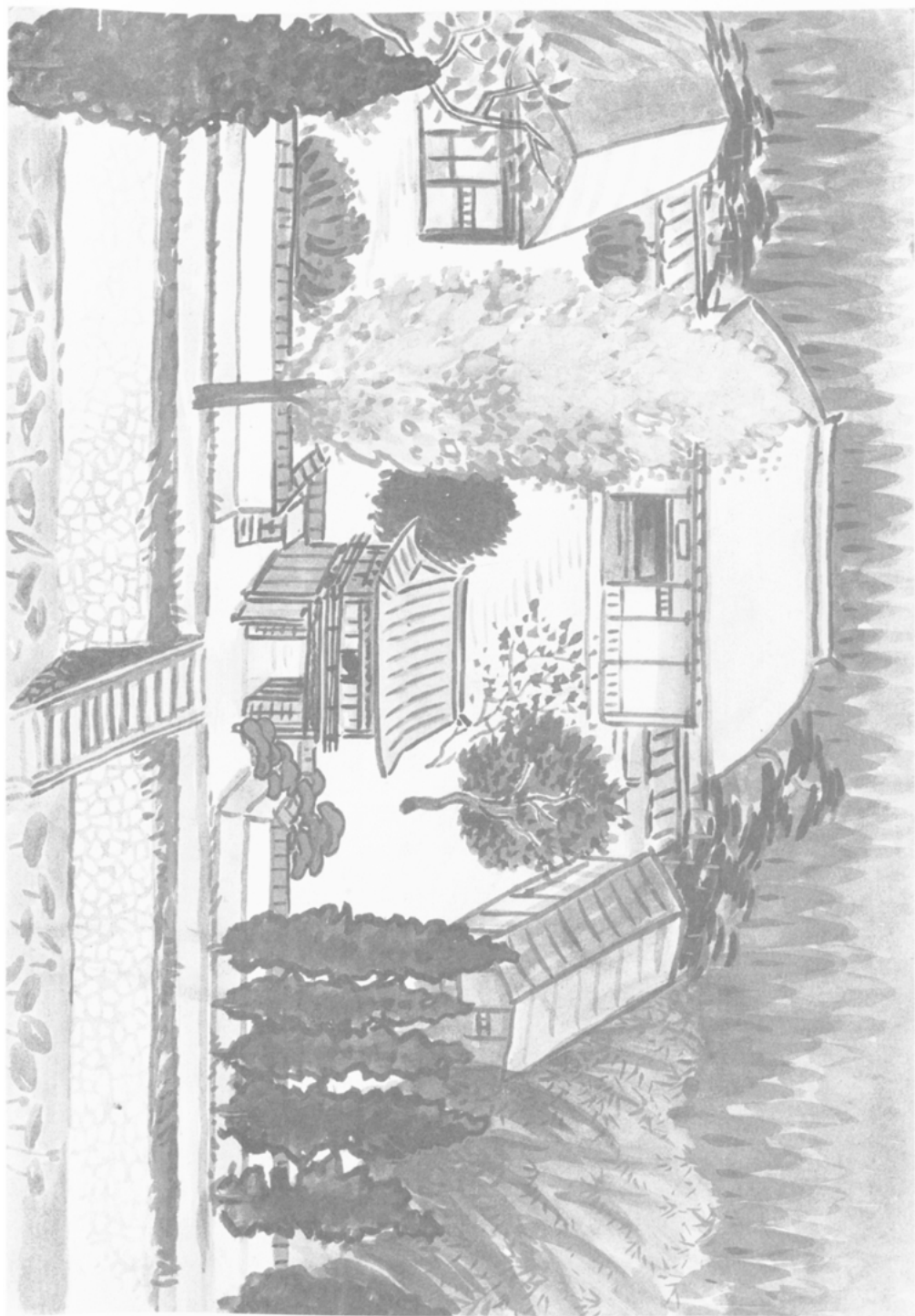
氏は弓勢子刀自の令孫として生れ。明治
 十五年司法者出仕して官界に身を置き。
 大に成事所ありしか。神を以て人
 間の罪をさばく事に何^カやまず、
 と官軀を捨てて帰郷し。一生も郷土の礎石となる

と本懐なりと。士に親しみ後進指導と文化促進のた
 めに挺身しつゝあだが、目前の凄然たる有様を見了。
 「之は大事故だ、何とか存りければ伊野の莊^{イノ}や、神稻村は正
 かしてしまふ。手も束縛して自然の親威に屈服しては人麿の恥

辱である」と死を来せしめた。

祖母居弓勢子刀自。父君誠民に自介の決心を發表した。た
 えん柱とすして天皇の洞悉に身を沈めりとも。二の水禍を防
 ぎたい。せし御中ししが、夙度^{ソクド}いし豫て研究してあつた堤防工
 事の内容と、計画を言々向う金精神を二めて力説した。御主人
 も心から其の志を喜び。松尾家の金財産を傾けても喜んで
 い。御主人は人麿の幸福のため大にこれと激勵した







時は明治十六年十月。土地所有者五十
 余名を滋恩院に集め。其の計画を發表
 した。

先ず第一に堤防工事にかかり。其の間、
 河原と与つた田を墾する事と。竣工

予定を廿五年とし。其の間。地所有者は地券(權)

を用墾組に無償提供し。組合は十五年後所有

者に返還する事と。此が主要条件。津野庄との交

渉はこの間一平に対し。日間無償出賃する事とい

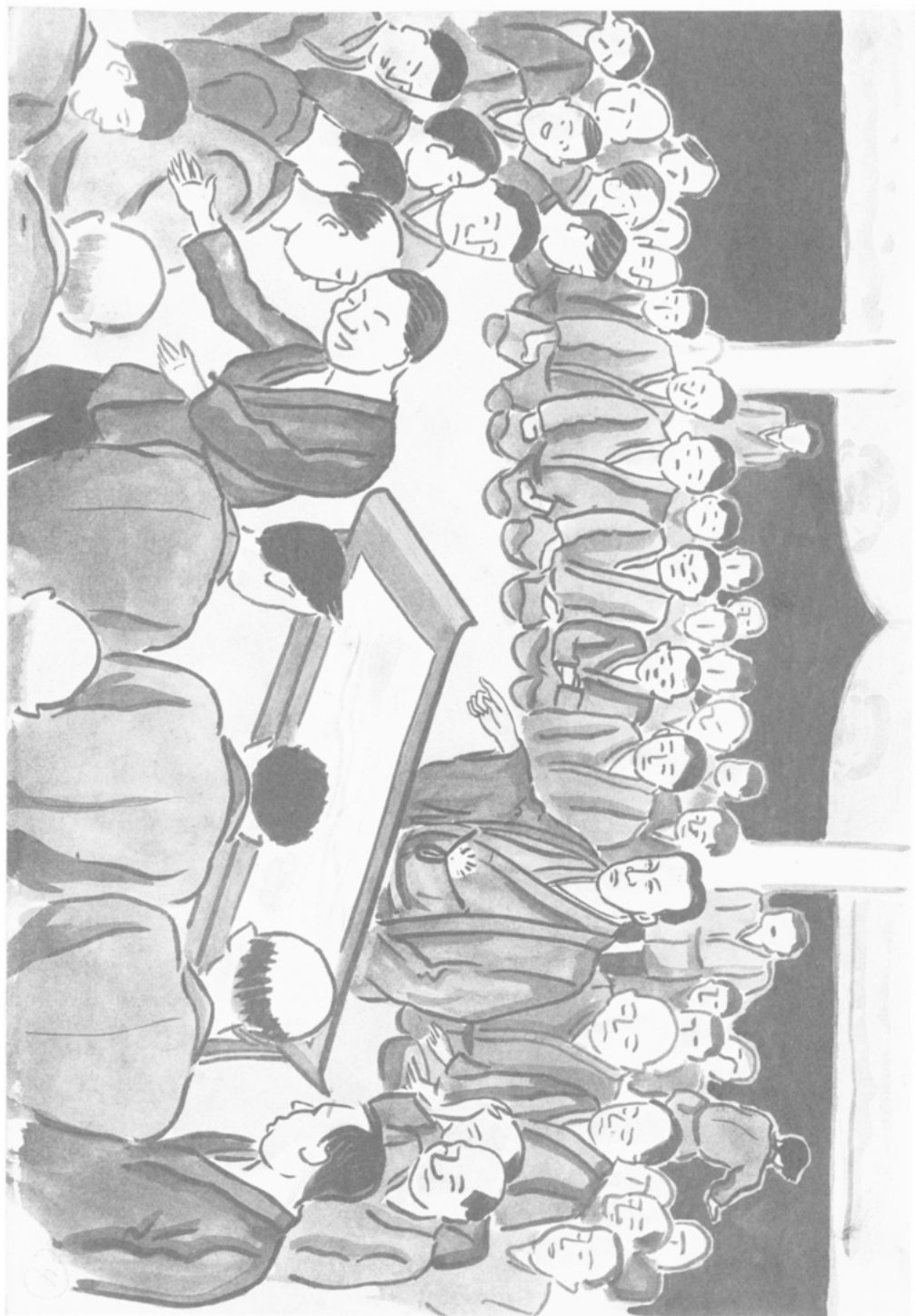
案であった。

又用墾に加わる同志は。この資金

を十五口とし。權利義務を遂行する。

主唱者松尾千振氏。其の内口も愛持たしと熱意

を披瀝して相談した。

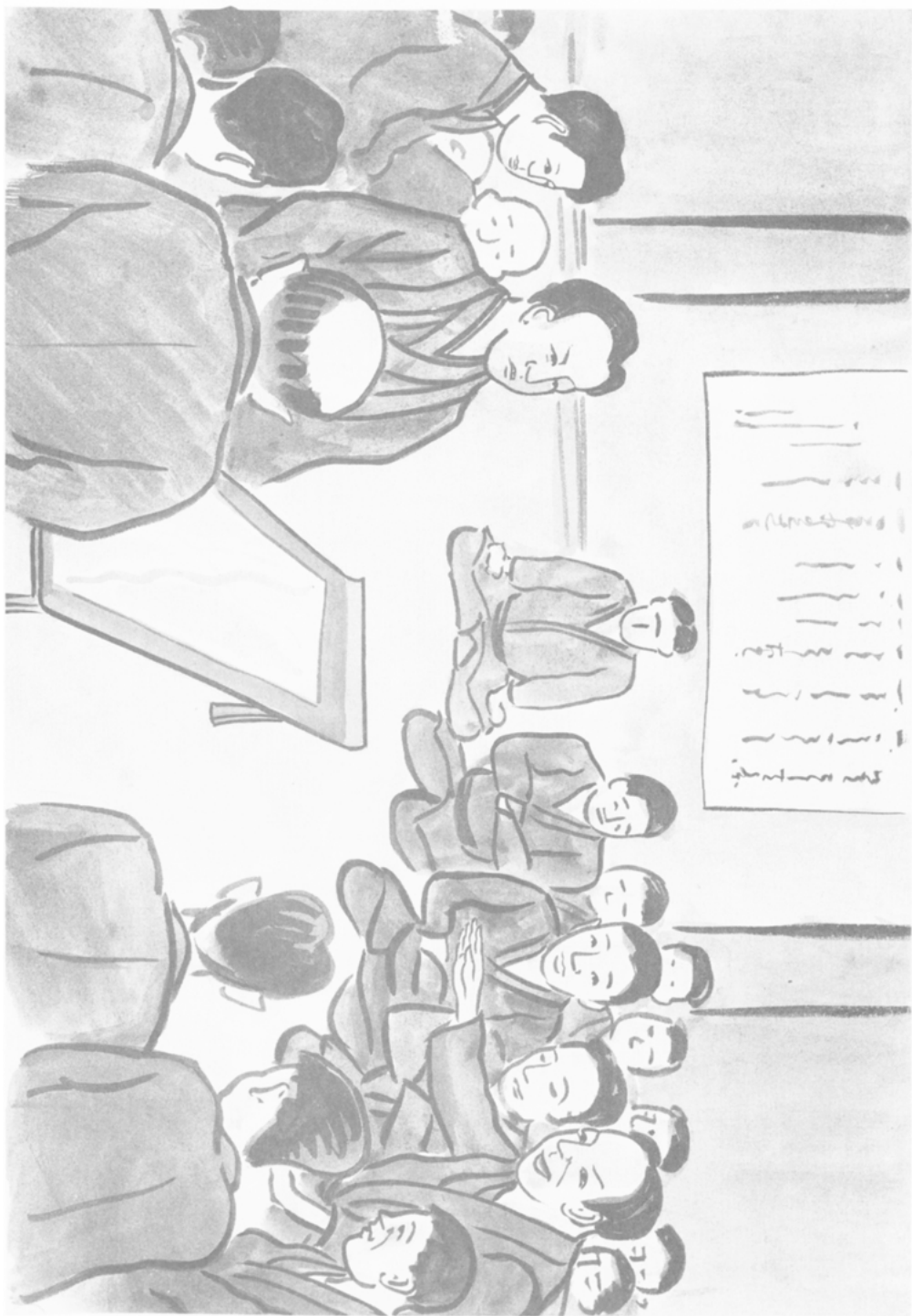




「皆さへ。大体、胃子は只今申上たよ、
 存せられてあります。更に細部に亘つ
 ては、御賛成者と協議の上足めたと思
 います。二水に対して反対の方があま
 りです。したの御意見を承りたいと存じます。」

「んた。すると笠中の片隅から
 「いやわしは反対だ。そんな無稽茶に近、大任事が伴
 野区位の小さな部落で生まるものではない。わしは嫌
 たッ……」

「わしも嫌だ。第一、あんが、河原のよくなまの
 恐ろしい土地へ。何所から土を運んで来るかしらんか。
 到底出来な、相談だから、はじめから反対だッ」
 「いやわしも嫌だッ……」とどやどやと席を立
 つて帰える人もあった。後姿を見送る千振氏
 の面上、涙のすみじりか漂っていた。

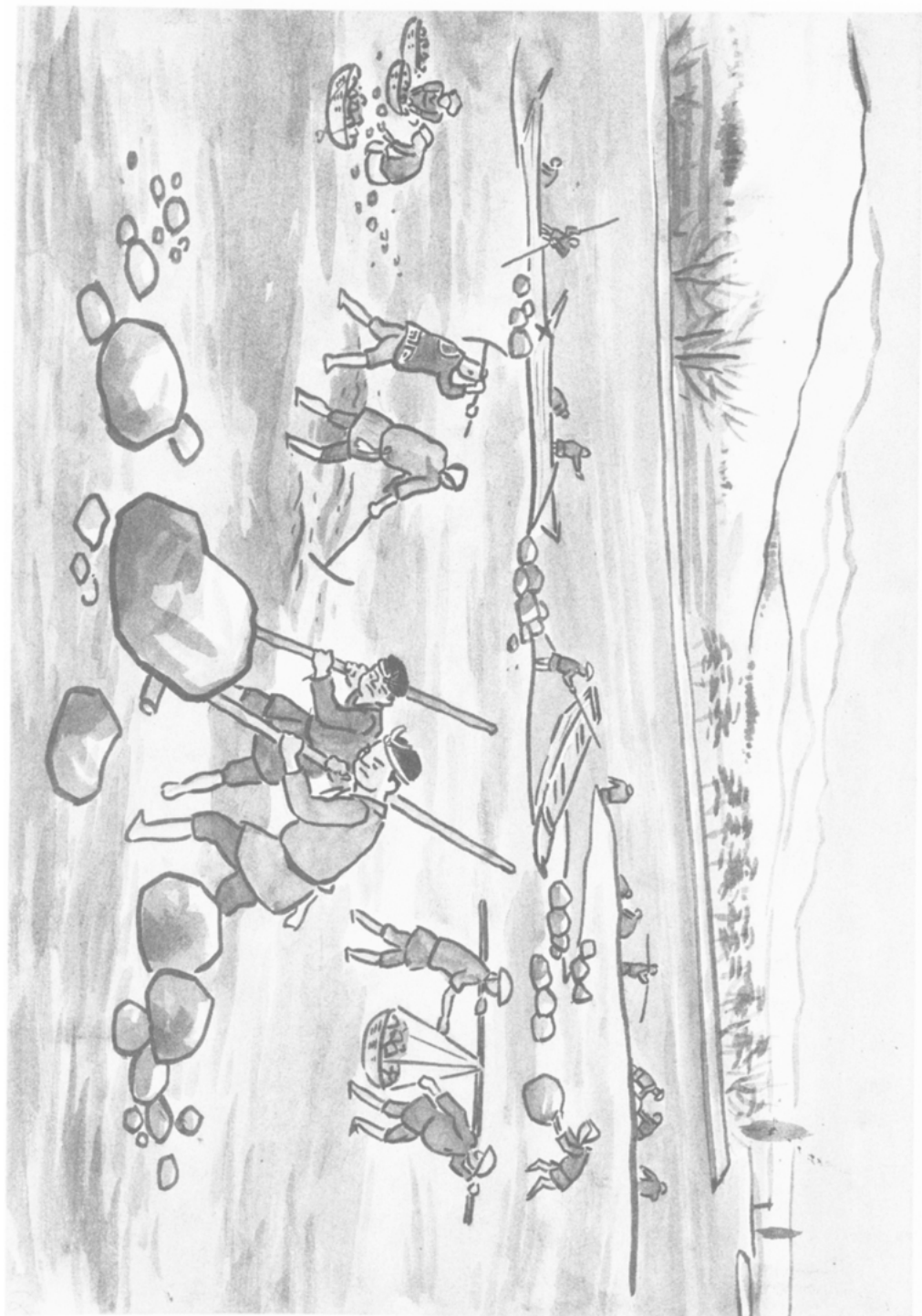


それまで。腕を組んで下を向いて考
 えているか。吾睡りしてつたの判り
 なかった名橋勝治氏は、むろり頭を
 あげた。
 「わしは大賛成だ、どの難儀によつ
 かけてやる。外も衆はどくだな……」

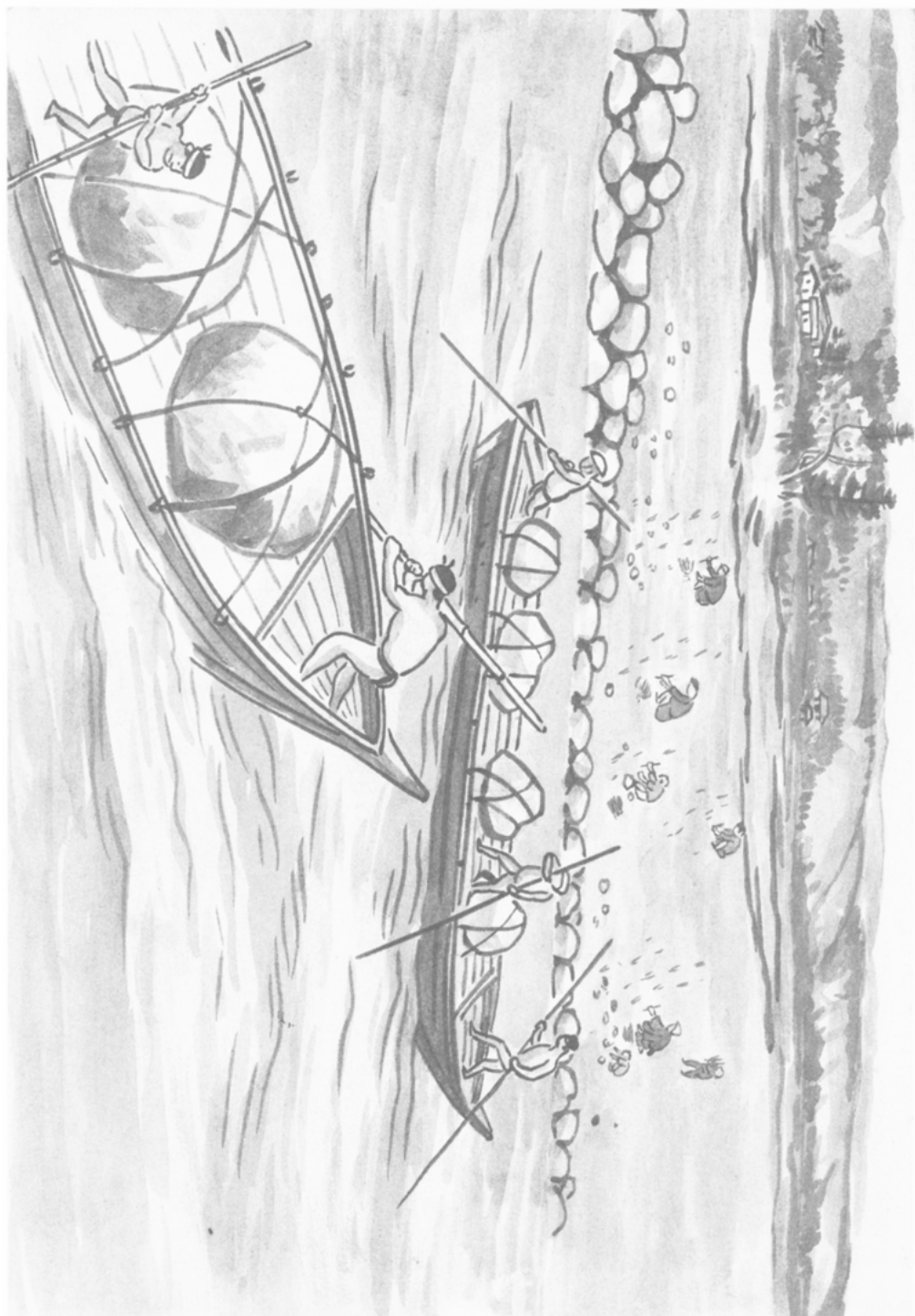
「わしも賛成だ……後々子孫のために大にやる……」

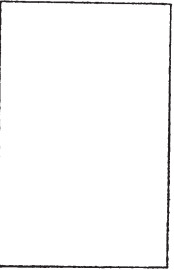
杉尾 為誠 氏も両手をあけて叫んだ。
 「わしもうかす」「俺もやる」と此處に同志三十八人。
 振込を念せて三土名が、ずれも死生を共にしようと固
 決意の下に。心と手として、繋いだ閉鎖組が立ち上

った。細則廿一条に及ぶ条約書が。閉鎖組申合せ
 規則が出来あがった。



平
 明治十七年三月十日。紀元節の
 よき日を選んで。いよは南蠻組
 三十二名が天童の水窟と戦を開始
 した。平四圍の山は白雪が銀色
 に輝き。足元を流す水け「るぎ」
 のように鏡かた。だが烈々たる開戦と。子
 孫のためにと、人類愛に燃え立つ者は。胸
 中にくすまいて。寒きものは。猛烈と自然心
 の暴威に挑みかかった。





平 つかへ櫻が咲く。耕西寺跡の丘から嶺山々。薄緑の衣をふわり冠り出た。

平 わすか、距離に辛じて石を積みあげ。内側、河原を堀り返す。少し

でも苗を植えて食糧を得たりればなうりあつた。だが、永の間、水よりにはせたま言わば天皇河

原に等しい土地の南壟は、至難中、至難事であった。

平 大河、小名、利河原はコリトコ、固かつた。鋤物も

鋤物も受けつない。考えた末に槍、穂先のような鋤

鉄の「ミ」で火を河原にかちては苗を植えた。

それとも時々穂先が折れて穂正位大地は固かつた。

平 一方築堤に力用している組は。土台が確かして、

ちくちくは駄目だ。十四人掛でも 身じろぎせぬ

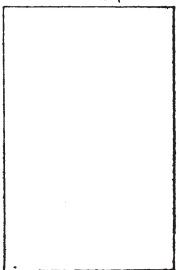
大名も。平田村出羽各あつた。三日もかかて運

搬す。昔雨が降つた。



7

平
 中々に工事は進捗しんしゆくと存ぞんじた。
 其の間には多に水嵩みづかみが増ましてきて、折南
 築いた堤つとみがつかうと出崩でしなれたり。急場
 凌しのぎに山やまから切り出した「ソダ」を入れて水
 を防まいだりしと存ぞんじり仕事を進めた。



「大キク
 フッア……と流れたッ……」

誰か大声に叫んだ。足も「ソダ」を入れていた岩橋勝治氏
 が「ソダ」に乗りたまま激流へ巻き込まれていった。

「大キク……大変だ、流れたッ早く助けろ……」

人は必死の形相で河原を走った。

「大キク……心配するナ……」

平
 流された岩橋勝治氏は冠かむりを脱ぎ捨てた。「みり
 ごとくした。衣服を捨てた。禪ぜん一本の禪杖ぜんじょうを捨ててしかり
 「ソダ」に五つたとき。芥天の渦巻うずまきの方見ると、吸い

込水みづで行く。河原を流れに……走ると足は次第に遠
 小勝負こせうぶになつた。「大キク」と突如水煙みづけむりが立った。追いか
 けていた人々は「……と目もくらんだ。やがて怖おそい目を開

いた時には。あちかか手てを切きり岩橋氏は岸へ泳ぎつ
 いていた。

「大キク
 思おもひが、驚おどろ……と比喩ひよがけられた。



今日も同志三十名の開製組は。全員
出勤して水と戦い止と取組んだ。

上村四才から若きは三十才位までが中心
と名^{ヨク}り、時として付頑是な小字な
子傳達。父如兄弟の母如 母が。心死

力作業を続け増えを見え。子傳心にも平伝、
つれづれ。細腕に石を抱いてもうもろと工事場
へ運ぶ女を眺めて。今更の人は涙を流し極
打ち込め。大きな石と掬いあった。



正事に着手して本年五月。明治十九

年しんねんの五月。あはれ嘆なげ。名草なぐさの香かほりも

南々なんなしく。そこの心こころも涼すずききつ時ときに用

壘組るいぐみの人々ひとは双たわ手をてをまぎらてきまんだ。

三年間さんねんかん、義用ぎようは切きり奏そうしての勿なら

起おこ点てんがり三さん百ひゃく余よ間かんに自みづらし臺たい々々たる築つ堤づ

がう成なり成なりした。強つよく息いきをとり人々ひとの回まわりに

は喜よろこぶ色いろが溢あふれた。だが其その年ねんの五月ごがつ雨あめは。天あまの川がはの底そこ

が抜ぬけたらと思おもひ少すくなれるばかりの長なが降ふりであらた。

増水ぞうすいする天あま垂たりは怒いかれれる毒どく箭や。如ごとく。大島おほしま龍りゆうの口くち

中ちゆうに別わかれ返かへるや水みづ勢せいは。更さらに对岸たいがんの物もの兵へいと堤防ていぼう

にまりて勢せいを増ます。ももに用よう銀ぎん壘るい堤防ていぼうへ叩たたきつて

末すえす。急いそぎを知らしらせた慈恩じおんの平ひら鐘かねは。

雲足うんそくは低ひく垂たれた伴野ばんの中ちゆうに響ひびき渡わたる葦あし笠かさは身みに

と固かためた用よう銀ぎん壘るい組ぐみの人々ひとは。漸おそく出で上ありたはけり、堤防ていぼう上かみ集あ

つた。自みづから家いへをよよし流ながれても堤防ていぼうと盟ちがひをなす。命いのちもか

けり堤防ていぼうを守まもり、而しかも堤防ていぼう上かみも東西とうざいに走はせ遣やつた。去さ後ご

を遣やつた。土つちを遣やつた。木き木きもかかり倒たれし。或あるは背せをけ

かして水みづを防ぼういだ。時々ときとき。ワワフフ……とあけり歡よろこび

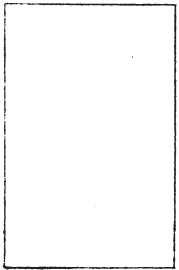
は水みづを遣やつた最後の叫こゝろである。人ひとと水みづと死しの戦たたかひであらた。

「ワワフフ……」と誰たれの口くちからともなくあけられた声こゝろと同時に。

三さん百ひゃく余よ間かん、堤防ていぼうは轟とどろ然ぜん大音響おほいんきやうと共に欠か潰つぶして地響ちきやう

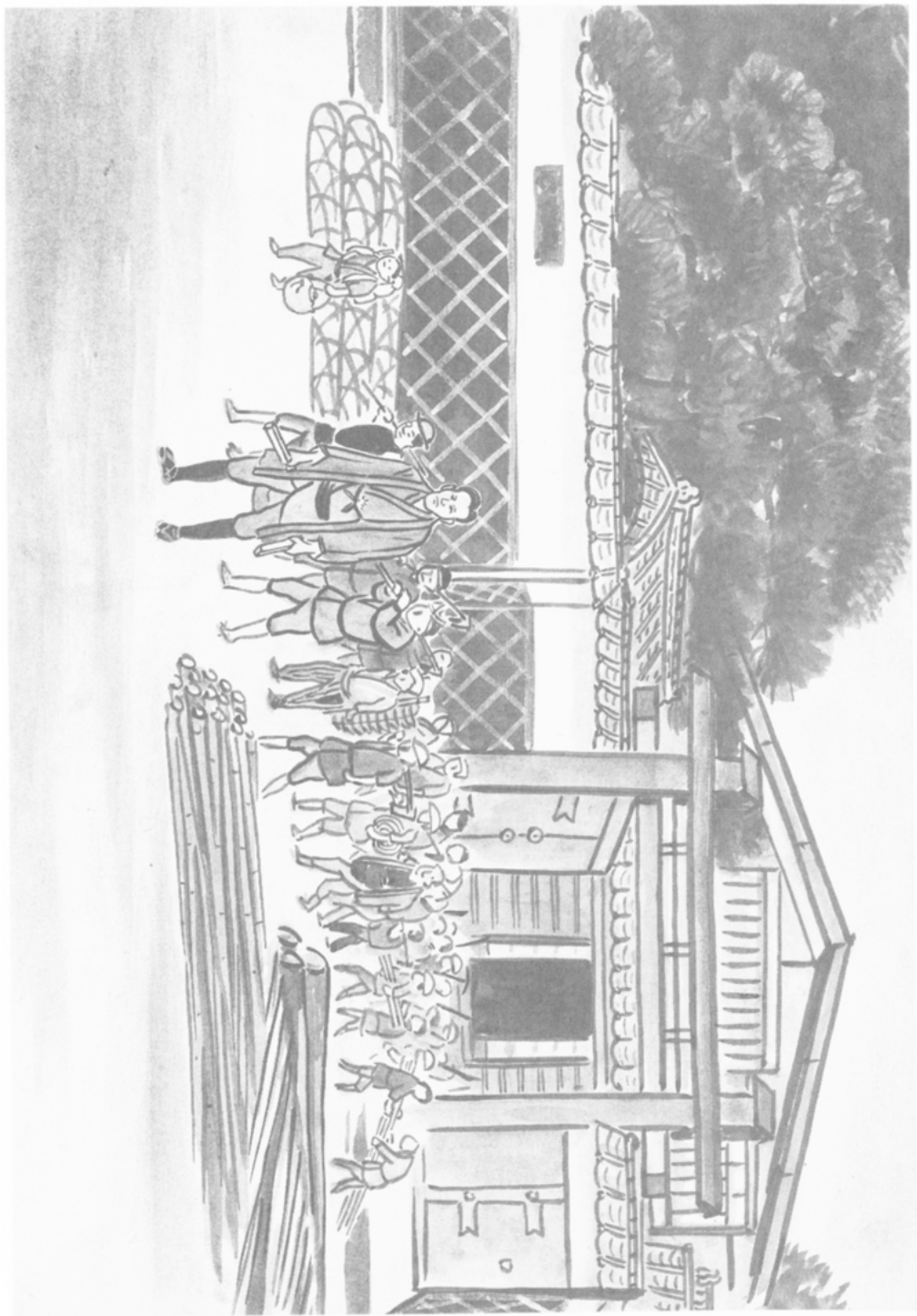
は人ひとの腹はらを工たくらした。





三年の苦心努力も一瞬にして潰れ
 去った。昨日の耕地も白馬の天を舐ける
 が如く天竜の濁流は躍った。力もきた。
 實力もきた。

依り最たる品物を手放した。残るものは裸一貫の五尺の
 体と。烈々たる閉志のみであるが。それとして、逆つ
 ぐ之事也。開墾組の人名は天を恨み大地に喰
 いて血の涙を流した。

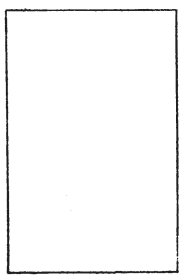


二の傍欄を目前にして。松尾千振氏は
 猛然と勇氣を奮い起した。今二のわし
 がくちげたら。今迄の苦心と努力はどくな
 る。三十一名と同志の人名はどくなる。
 けんぞ。二の位の手て既右垂れていら
 るか。もし。い至験だ。基礎工
 事にも自信がった。この場ばたの屏外びんがわも新しく考案し
 た。大才たいさい諸君も一度やうして千振氏の伯父大沢
 徳太郎氏松尾為誠なほまこと氏の二を相談相手に再びついで鶴つる瑞みづ

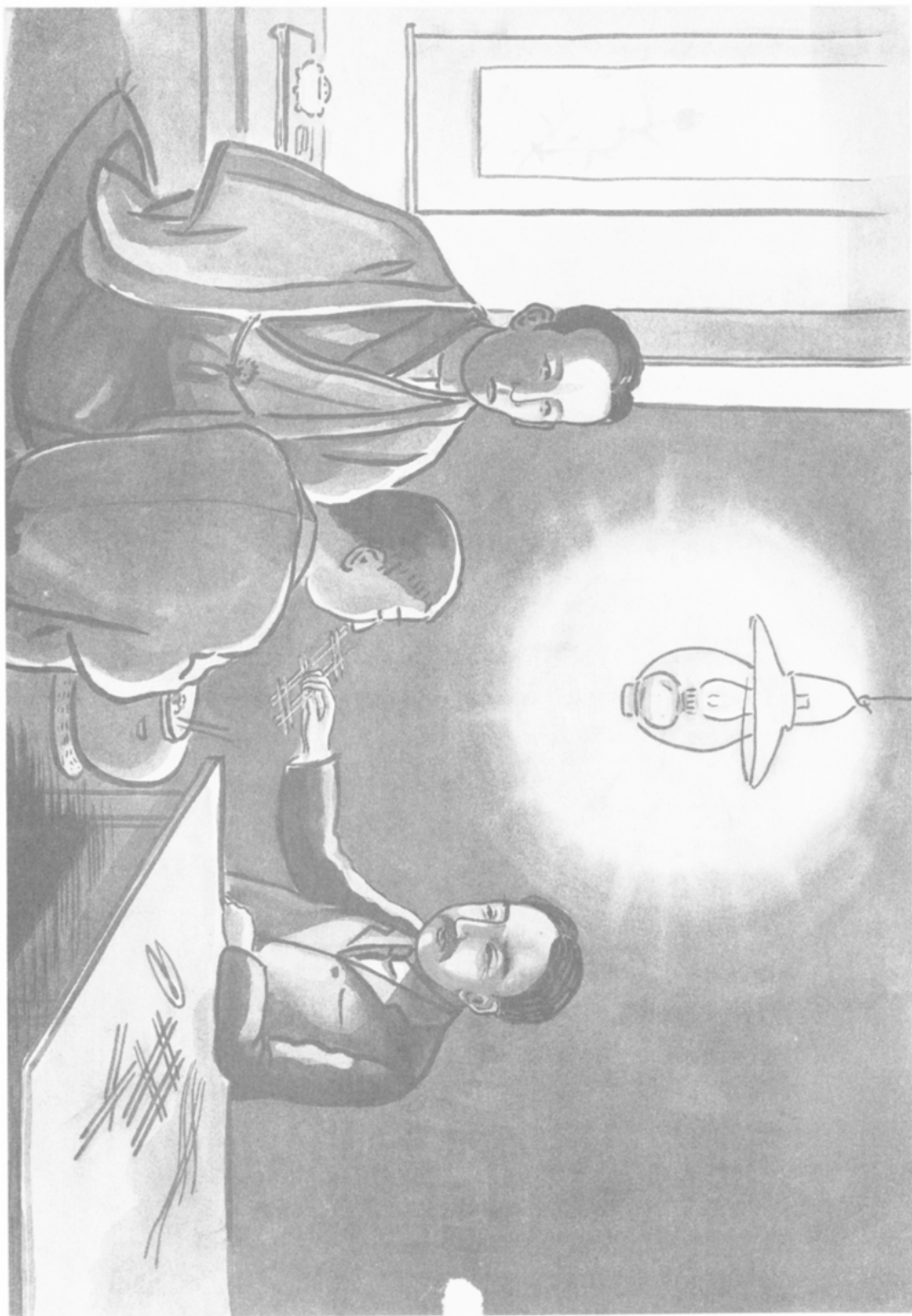
平
 之を見えた人名は「松尾君もいにかげんに諦められ
 ばいいに……」天巻の水には吐物なにい……といふ音が陸
 下を二えた。



平
祖母居り執事力自ら。父君誠氏も一言惡
疾らし、事いわず。作の孫。不撓不屈存裏
魂を頼も、裏に見せしめた。一方千振氏は
縣令誠最と上治水方面に大柳と乳毛繞竹泉
に寄りて即日工事場に出る同志の人々と疲
食と共に。堤防工事に全身全霊を打ち込んだ。
理解ある父君誠氏は明治三十年三月十六日。



工事。前途幸多分水と念し、世を去られた。其時、執事
加自七十才^{せが}であつたが、少し元氣が衰へて来た。そして傍孫
の事業に全幅の希望と信頼をよけて見せしめた。お悔み
に来た村人達に回す妻は。息子に先へ逝かれば決して悲し
いと思ひませぬ。妻にはゆるし。孫も、いと可愛いの用
意埋めし、りものがあつた、と笑つて答へられた。之を、
た千振氏の高貴、正に天を衝くものがあつた。

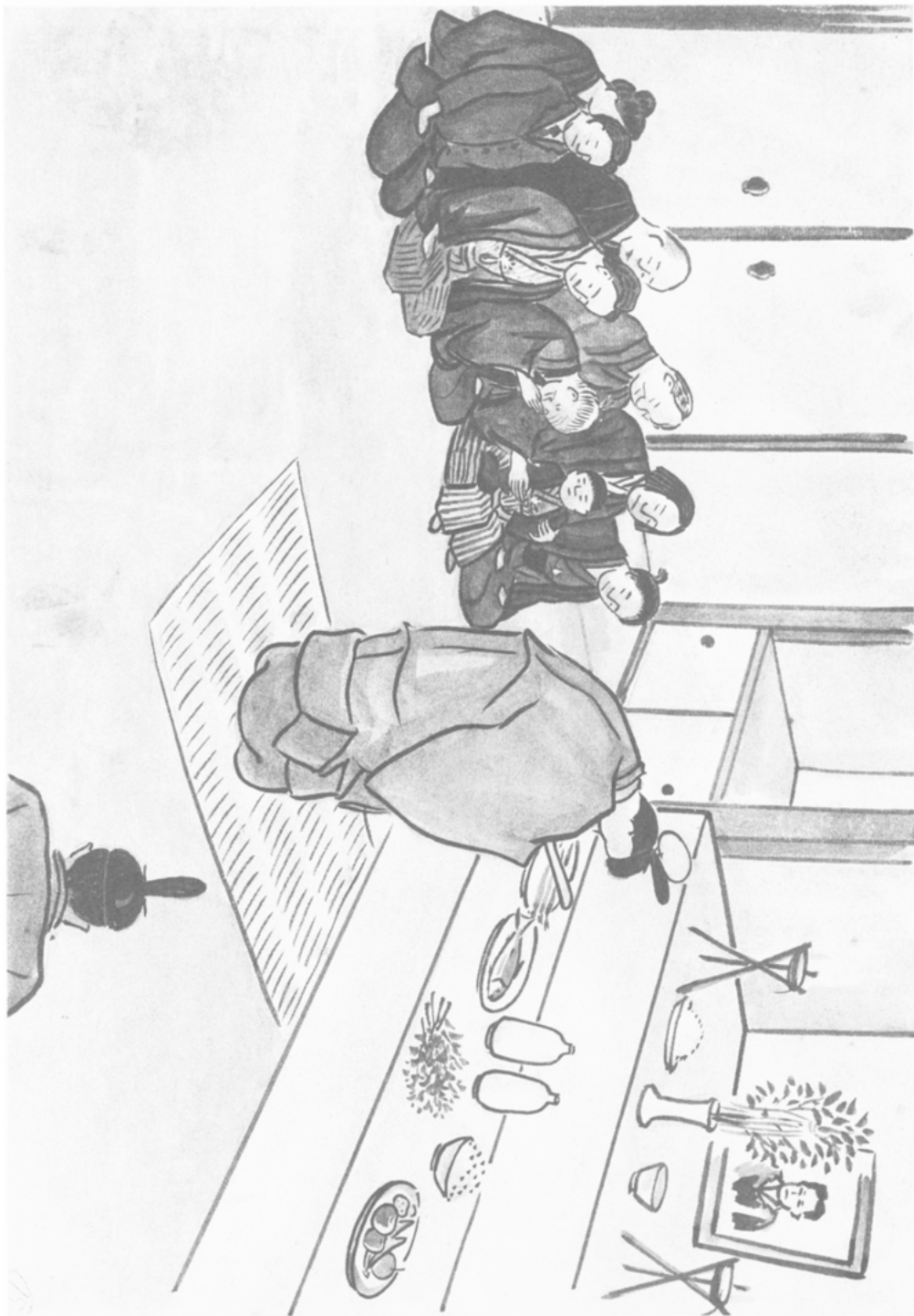


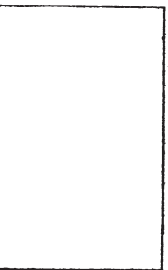
同志の小澤今朝民方に瘦弱して専ら
 二工事。相淡相手と有り。自分も現場に強
 して用鋸組と一緒に働いて、た飯田土木出張
 所主任の小西虎之助氏は奥に開鋸組にと
 ては杖と柱とも頼む明生であった。
 「小澤さん、非常に面白、考案が出来
 たり。鋸著と元結を一把もて来て下さい」

家人にきく 取寄せた鋸著と元結で結ばは組
 合せ。この型を作りあげた。

「元は私が考案した木工元結です。従来の堤防工事は
 和蘭式水制法でした。所謂レフです。どうも面白
 く有り。大体対岸の惣兵五堤防は旧式水制式で自
 分の考案が「字」は他に「ん」な迷惑があらまきわぬ
 と、やり方だが。それは余りに勝手です。水は押さ
 して防がぬは直ぐ水防ではなと思ふ。この木工元結を
 自ら成功すると思ふ。如何です。お展覧さん……」

下度折子表合せた千振氏にこの型を示して説明した。
 「如、この型を至極会感です。自分も各所から人はほと
 う有りたかきわぬと、元結を人間として賜し奉ります。
 早速はお名に有り、木工元結の作りかた、お名か
 と、千振氏は勇み立った。この小西虎之助氏は研究
 に研究を重ね、しばしば夜、明くまで鋸著と組立ては
 考案を練った。



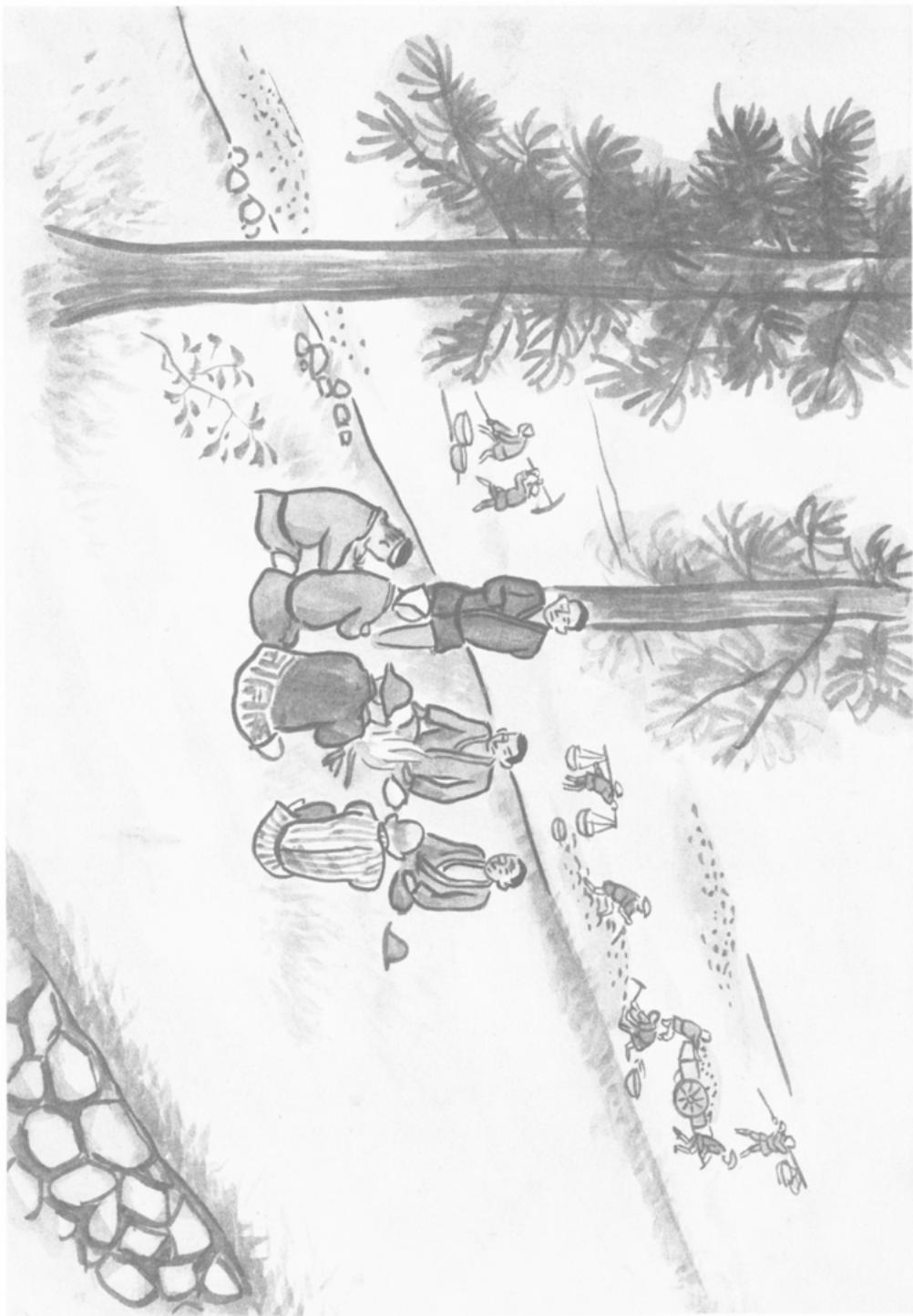


平
小西虎之助氏が案の木工沈務百願が成績
がよかつた。之れに勢を得た用懸組は夫に
と登る心で働きたが、突如大打撃を
蒙つたて、同乃……といふまで茫然として
任勤つた。それは盟主千振氏が明治十
年二月廿六日、春手に徒試、曉に豊正馬と
了急逝した。盟主を失つた用懸組の
人は暗裡に灯を失ふ。明日から……何処へ行
ばよかつた。神も佛も今や、に無情だ。集つた同志の人々
は互に手を取ら合ふ迄に、そして夫を恨んだ。

靈前に供えられた奥柳の整齊卓も、人々の心を感ず
てか、かすかに唄へる。かへつた神火も心ありてか
また、いへる。
木に育つた子息、珍重する足跡に抱き寄けた大空定
作氏は、小舟を志と握り、珍重……あゝ吾輩は小舟
の……ひとり舟をたてりなう。かゝる大將になつてから
心だか、身だか……また西を舟も判りて……

骨をたてた大空を舟で珍重するの事をもつて、
舟で……男泣きにはいた。

この何様を見つけた合志の人々を嫁め。女史の執子
乃自ら耐え忍び出すに……と世もあつた。



萬難來^{マシ}は^キ来^キれ^キん^キ。わ^キー^キ達^キ
 妹^{イモ}人^{ヒト}保^タ明^{メイ}性^{セイ}十^{ジュウ}九^ク年^{ネン}、大^{ダイ}漢^{カン}氷^{ヒョウ}に^ニ埋^ウ防^{ボウ}と^ト所^{トコロ}
 に^ニ死^シん^ンて^テい^イる^ルだ。今^{イマ}生^ナき^キて^テい^イる^ルは^ハ繼^{ツギ}ぐ^グも^モ
 の^ノだ。死^シん^ンを^ヲ気^キに^シて^テ有^アら^ラ何^ニん^デも^モ出^デ来^キる^ル。

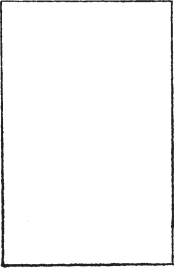
此^{ココ}所^{トコロ}で^デ出^デ来^キれ^レた^タと^ト信^シん^ンだ^ダ。祖^ソ祖^ゾ様^{ヤマ}。何^ニん^デも^モ有^アら^ラ
 千^チ振^ビ振^ビに^ニす^スま^マぬ。如^カう^ウ。中^{ナカ}で^デ扱^アつ^ツと^ト三^{さん}分^{ぶん}
 非^ヒ壯^{ゾウ}者^{シャ}宣^{セン}悟^ゴを^ヲま^まり^リて^テ振^ビを^ヲ解^トく^クて^テ立^タち^チが^ガつ^ツた。大^{ダイ}漢^{カン}愧^{クワイ}
 太^{タイ}郎^{ロウ}松^{ソウ}尾^ビ爲^ヰ誠^{セイ}而^ニ外^{ガイ}更^{メイ}に^ニ大^{ダイ}泉^{セン}定^{テイ}作^{サク}平^{ヘイ}快^{クワイ}飲^{イン}波^ハ
 郎^{ロウ}泉^{セン}處^{トコロ}者^{シヤ}岩^{イハ}橋^{ハシ}勝^{ショウ}後^ゴの^ノ四^シ氏^シが^ガ補^ホ佐^サと^トして^シて^テ工^{クワ}事^ジを^ヲ
 當^{タウ}へ^ヘる^ルこ^こと^ト有^アら^ラた^タ

平^{ヘイ}野^ノ子^シの^ノ代^{ダイ}表^{ヒョウ}と^ト評^{ヒョウ}す^ス。人^{ヒト}が^ガ三^{さん}名^{めい}工^{クワ}事^ジ場^{バウ}の^ノ外^{ガイ}
 へ^ヘ来^キた^タ



「あなた方も千振さんがお入りになつて何かと都合が悪くうから。私達はお手休ませいあけたと思つて相談に來ました。」

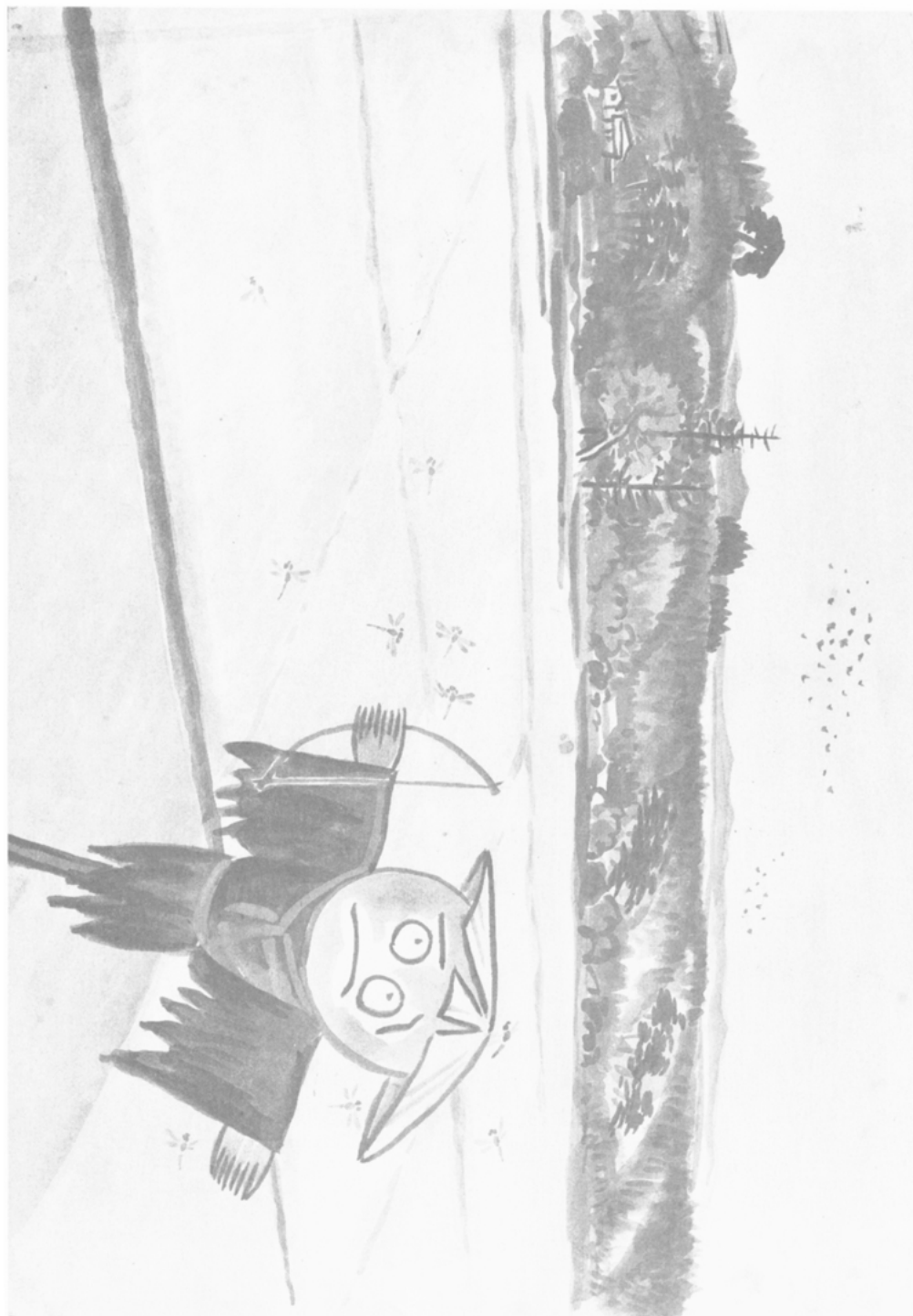
「御好意はありがたうが。二のまゝとどくも續けて申かれそですから……」と為識氏は田崎に断ると。

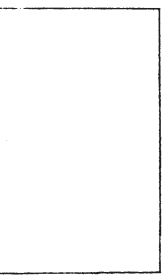


「いや、それでも見すゝあなた方の若しお手を傍觀でまきませぬから……」

「おい、おい、君達は今頃になつて何を云うんだ。慈悲恩愛で最初相談した時。席を蹴つて歸つたじやないか」

原虎吉氏が氣色づいて前へ出て來た。後の方では「おせ！、金庫をへた、相手になるな……」と口々に言うので、話はそのまゝに續けられず、代表と称する人は手特無沙汰で引去つて行つた。



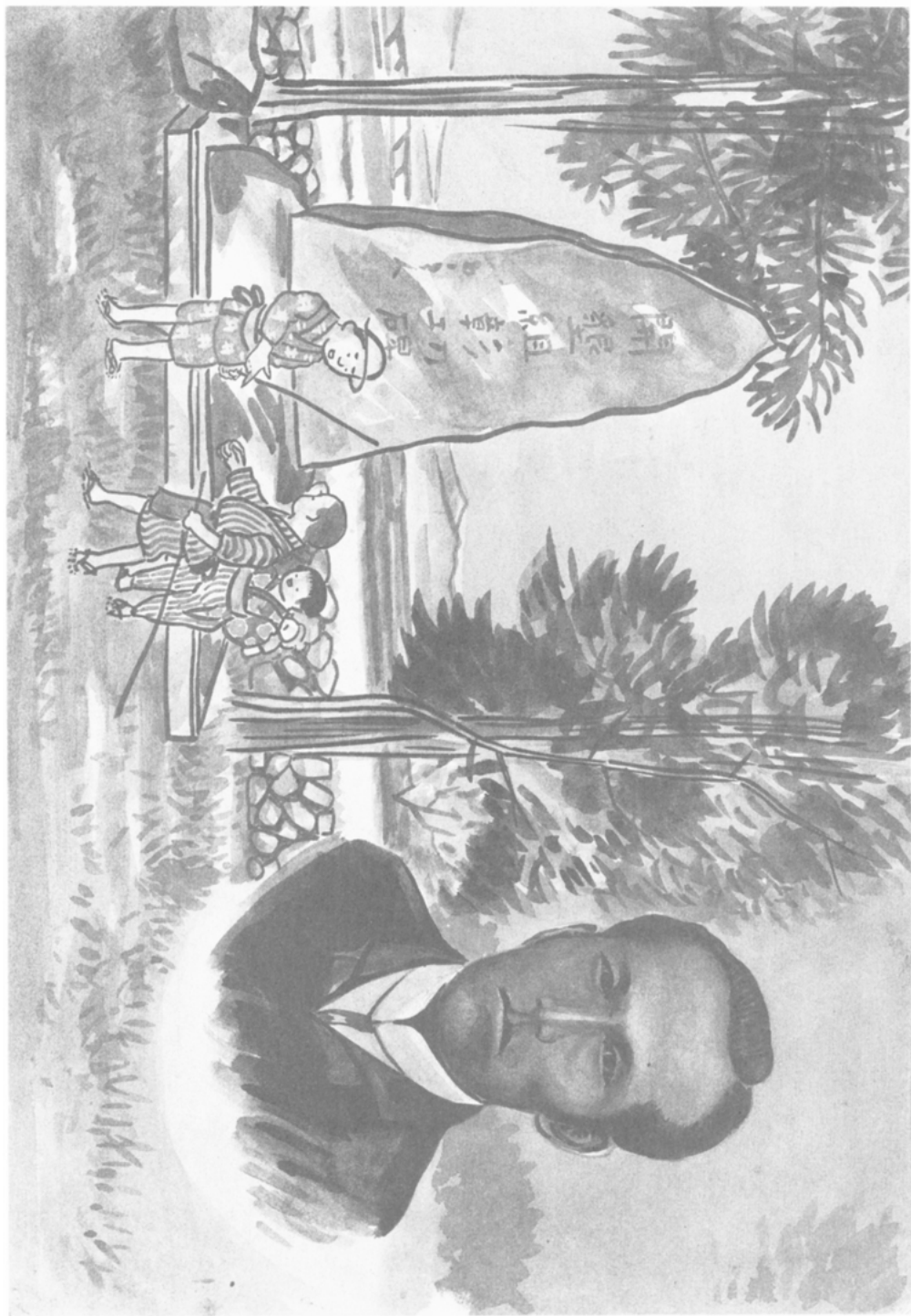


明治三十三年、そのもの大工事も、初めは
 振氏が計画したの勿起点から、越々阿
 島境に到る石堤九百間、物の美事に
 完成、同時に美田三十七町歩を用
 いた。
 高須領時代の御用米地に

再び黄舎波が打寄せた時が来た。

だが、前後廿五年の長期に亘る水と戦いは、概
 像だよりよき、浪、歴史であった。ある時は

一晩中豪雨と濁流の中で堤防を守った。干魃に見
 舞われ、食う米も麦もなく、僅かに大根の葉に麦が
 からんだ并畜で働いた。組内に病人も出た。前途
 を心配し、死んで行くと人もあった。あらゆる人生の
 試練を躓き、躓きを接してやえ来た。其度毎に更けるな。
 控けるな。気を落すな。死んだ千振氏にすまん
 と一同力を付けた。そして、力は大自然を美
 事に征服した。見よ、やうと風に波うつ黄舎の
 波を、目もける竹も豊かなる、豊かなる、秋を……





天の中川水増して。河伯猛り狂り時
 があるとも。微動だにせぬ不境不底
 の農家民魂を遺憾なく發揮して。
 築きあげた開墾堤防の大石、巨
 巖よ。心あらば廿年の苦澁と和庭
 千振氏の偉大な智能と功績も千古の後まが
 誇り伝えよ。

明治三十五年五月。村民相謀り。勿忘
 開墾新工碑を建てた。南に洋々と流る
 天龍の水。春來れば堤上に咲く萬葉の櫻。共
 に天地有情。誰かこの大偉業に立ぬものが
 あるか。南信濃の地に残る語り伝ふる物語
 小。漢十七までと我等、誇りてある。

竹村浪の人の著作と人

北原 優美

「開墾提防」の著者竹村浪の人は、本名を竹村清次郎といひ、明治五年（一八九二）四月二四日、飯田町（現飯田市）の商人の次男坊として生まれた。

その一生は波乱に満ち、青年期から壮年期にかけては東京で事業家として過ごし、敗戦の直前に空襲で焼け出されて郷里の飯田に帰り、その後は、紙芝居や、講談・浪曲の台本を書いたり、雑誌の編集などをして生涯を終わつた。

明治三十九年（一九〇六）に飯田小学校の高等科を卒業した浪の人は、一五才の時に上京する。このあたりのエピソードを須藤憲三という方が竹村浪の人著の『市川量三物語』の後書きに書かれているので、それを引用すると、

飯田小学校卒業後の一五才のとき大志を抱いて上京、いきなり「少年世界」で名前を知っていた大町桂月（当時の流行作家）を訪ね、「勉強して立派な小説家となり大いに金をもうけたいから、お宅の書生にしてくれ」とたのんだ。この無鉄砲な田舎少年の申し出に桂月は破顔一笑。「文士はみんな私のように貧乏なものだ。金もうけが目的なら商人になつたほうがよい」ときとして、五十銭銀貨を一枚、紙にひねつてくれた。

このあと、志望を一転した浪の人は木綿問屋の小僧になり、二一

才で独立して、アサヒ商会という会社をおこして一時は大金をもうけたこともあったが、第一次大戦前後の経済界の変動や関東大震災に遭い、資産を失う。株屋の外交員をしたり、再び会社を興してボロもうけをししたりしたが、そのうちに空襲で家を焼かれ、やむなく昭和二〇年七月、五四才の時に郷里の飯田に引上げた。引上げてはきたものの、食糧事情の悪いときで、なかなかの苦労があったようである。

東京にいたころには、旦那芸として新内・清元などに擬り、なかなか声量もあり苦声もよかったというが、飯田では、帰ってきた翌日から、自作の紙芝居を担いで街頭に立ち、戦意高揚の作品を公演した。

なぜ急に経営者から紙芝居に転じたのか、よくわからないが、村沢武夫著の「竹村浪の人」にもこの間の事情は書かれていない。

終戦後、しきりに昔の仕事仲間から上京をうながされたが、ついには東京に帰ることはなく、飯田に疎開していた岸田国士、森田喜平、日夏耿之介などの文化人によって始められた静話会という毎月の集まりに参加したり、雑誌の発行や創作へと傾いていく。

講談をはじめたのは飯田にきてからのようで、知人から「君は声がいいから紙芝居より講談でもやっただろうか」と奨められたのがきっかけで、自作自演の講談を口演して小中学校、P・T・A、老人クラブなどを廻った。若い人達が戦争中の後遺症で、まるで郷土のことが分からず、誇りも何も見失っていることに危機感を抱き、これをなんとかしなければと思い、郷土に題材をとった講談を書いたという。しまいには東京上野の本牧亭にも出演し、浪の人先生などと呼ばれて喜んでゐる。浪の人自身は自分の著作を評価して

講談本というと一部の人からは低級視される傾向があるが、そういう言葉を吐く人が、かつては講談本の愛読者であった時代があるから面白い。講談本は読書入門の一段階である。文学的価値があるとはとも思っていないし、そのつもりで書いたものではないが、郷土の人々の暮しと、政治経済がどのような関わりがあつたか、そして祖先の人々がどのように考えたかを知ってもらいたい。炉辺の茶話に、子供への昔話に、祖先の生活が語られるところ、私をもっともうれしく感ずることである。祖先の生活ぶりとは、すなわち私たちの生活で、けつして遠く離れたものではないということを知ってもらいたい。

(『お建様』後書き)

と述べている。

飯田図書館の村沢文庫の中に、彼が発行していた『趣味』という、その頃のタウン誌のようなA6判の小冊子がある。その創刊号(昭和二年一月一日発行)に、友人の矢高行路が書いた「紙芝居の小父さん」という一文が載っていて、浪の人の郷土の歴史に対する思い入れがわかる。

紙芝居の小父さん

ここに変わったおじさんがいます。一寸見ると大きな劇場でも持っておりそんな顔をしています。このおじさんは、飯田の学校を出るとすぐ東京へ行って、そして今度四〇年ぶりに帰ってきたのです。だびに着して苦労したおじさんは、遠い子供時代の思い出がなつかしくて、どんなに故郷を恋いこがれたことでしょうか。

○

しかし帰ってみると、飯田は昔とは似もつかぬつまらぬものに成り果てていました。このおじさんが見るもの聞くもの事毎にシヤクにさわって、グザルののは、故郷を愛する情熱の強すぎるためです。

「あのもの柔らかな情味豊かな飯田の空よ。おまえはどこへ行ってしまったのだ」と空を仰ぎながら、おじさんは危うく泣き出すところでした。

やるせない気持ちは、時々おじさんを駆けて子供の世界へ追いやります。子供らは「やあ、紙芝居のおじさんだア」と叫んで駆け集まってきます。昔のような面白い遊びに乏しい今の子供達がおじさんは可哀想で仕方がないのです。紙芝居を終えて、道真を入れたリュックをしょって唯一人夜更けの田舎道を帰ってくる時だけは、自然に鼻唄が出てくるようです。

元来義侠心の強い人でしたが、四〇年間の東京生活はすこかりおじさんを江戸っ子に磨き上げました。そして、芝居や新内や寄席などの下町情緒は骨の隅々まで沁みこんでいて、このどっしりとした面魂のおじさんの、何処にこんな純真なデリケートな詩情が宿っているのか不思議なくらいです。

しかし、何しろ、我等のおじさんは毎日むしゃくしゃして困っています。戦争に負け、火事で焼けて、どん底までへボクなってしまうた

愛する故郷を見ては、寝ても起きても、ゴアが湧いて、ゴアが湧いて、ゴアが湧いて、たまらないのです。

こういう妙なおじさんがここにおります。

前記の雑誌「趣味」の発行（昭和二年一月から同六年三月まで）は、大火のあとから始まって五年ほど続き、のち「浪の入通信」「觀光の飯田」などを発行した。この間、講談・浪曲の台本を二〇〇編ほど書き上げている。内容は、郷土関係のもの、立志伝一般向け通俗的なものに分けられるが、そのうち郷土の歴史に題材を採ったものに、

「御柱」「靈泉」「水晶」「お建さま」「裏向き弁天」「出世稲荷」「白隠」「台城の戦い」「笠松騒動」「開墾堤防」「二分金騒動」「大島蓼太」「道考と直侍」「巴御前」「雷電」「川中島」「恩田本」「お君地藏」「お不様」「赤田庄左衛門」「鹿教湯」「天狗党」「福島の関所」「行人様」「飯田のあだ討ち」「薄井竜之」「飯田事件」「赤松小三郎」「名優決戦」「長左衛門」「南山騷動」「神の峰」「惣兵衛堤防」「親田の作兵衛」「啼枕」「煙火試合」

などがある。またこの中の「水晶」は、昭和三年一月にNHKが募集した浪曲シナリオに、第一位で入選したものである。このほか単行本として、

「市川量造物語」「競売された松本城」「伊那の講談」「お建様」「風越山」「道を求めて」「神の峰落城秘話」「風越山と天童舟下り」「水引と民話」

などを発行している。

東京の家を戦災で焼け出され、郷里に帰ってきたものの食糧事情

がわるく、それに追討ちをかけるように、昭和二年四月には飯田大火にあり、市營の仮設住宅に住んだあと、白山神社の社務所に移った。のちに白山神社の近くに小さな家を建てて移り住んだ。飯田に帰ってきてからは趣味的な生き方をしたが、まさに波乱万丈の人生であった。

人々の記憶の中では、「白山神社の社務所にいた紙芝居のおじさん」という印象が強いというが、神峰城攻防の武田氏と知久氏の合戦の講談など、まるでそこにいて合戦の様様を見ているようだったという。

このシリーズでとりあげた「開墾堤防」について、浪の人は伴野に出向き、松尾家の資料を調べているが、松尾家出身の下平元護氏（中川村在住）は、少年の頃家నికిて資料を調べている浪の人のことをよく覚えているという。

子どもに恵まれなかった浪の人は、晩年は奥さんのさぶさんと共に飯田荘に入り、昭和五〇年一月二日に八三才で没した。三回忌に当たる昭和五年に、浪の人を偲ぶ記念碑が、知友の手で白山神社の境内に建てられた。

（この紙芝居は、豊丘村役場に保存されていたものから複製した。）

竹村 浪人 (たけむら なみのひと)

本名 竹村清次郎

明治25年(1892)～昭和50年(1975)

飯田市梅南小路に生れる。

著 書

『伊那の講談(天竜の巻)』『あゝ水曲柳』『お建様』

『神峯落城秘話』『新野の行人様』『糸平と竜之』『二分金騒動』

など講談・紙芝居の台本多数。

開墾堤防

平成3年3月15日 発行

企 画 建設省中部地方建設局
発 行 天竜川上流工事事務所

長野県駒ヶ根市上穂南7-10
〒399-41 ☎0265-82-3251

著 者 竹 村 浪 の 人

編 集 (有)北原技術事務所

長野県南安曇郡豊科町高家5279
〒399-82 ☎0263-72-6061

印 刷 双 葉 印 刷 (有)

長野県松本市城東2-2-6
〒390 ☎0263-32-2263

「語りつぐ天竜川」の発刊にあたって

天竜川は独特の形態をもつ河川です。上流部は諏訪湖が洪水を調整して比較的穏やかな表情をしています。後背に多雨域をもつ三峰川・小渋川・太田切川などの支川を合流するたびに、洪水とともに大量の土砂を受け入れて一気に急流土砂河川の様相を呈し、途中多くの狭窄部の間に氾濫原を形成してきています。

一方、この氾濫原は伊那谷の穀倉地帯でもあり、地先の人々は出水ごとに氾濫する天竜川との間に涙ぐましい闘いを繰り返してきました。反面、天竜川は母なる川として地域の人々の生活を支え潤してきました。田畑を灌漑し、漁獲をもたらし、山深い信州と他国を結ぶ物資の交流の場でもありました。情操のうえでも深い関わりがあり、独特の風土や文化を育んできました。伊那谷の風土は天竜川と無関係ではあり得ません。今後とも、天竜川を危険なものとして遠ざけたり、水があるからといって過度に取水したり、汚したりすることは避けねばなりません。

この天竜川を鎮め、水を高度に利用するための地元の長い営みの後を受けて、昭和12年から砂防を、昭和22年から河川を国が直轄事業として取り組むようになり、その間地域の皆様からの多大なご協力のもとに、天竜川の安全性は格段に向上しました。しかし安心は出来ません。絶えず流域の変貌をみつめ、河川施設の整備と維持管理を図っていかねばなりません。また、水害防止と利水に一応の成果をみた現在、地域にとって望ましい天竜川の姿を考え、その方向に向けて管理してゆくことがこれからの課題であると考えます。

「語りつぐ天竜川」は、天竜川の治水に関する地域の知見や経験を収集し、広く地域共有の知識とすることにより、地域の方に天竜川に対する認識を深めていただき、よりよい天竜川を築いていくことに役立ちたいと考え発行するものです。

なお、ご執筆いただいた方々には、自由な立場からお考えを披瀝していただいていますので、建設省の見解とは異なる場合がありますことを付言します。

建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所
所長 北川 明

「語りつぐ天竜川」目録

- | | |
|---------------------------|--------|
| 1. 伊那谷の気象 | 米山啓一著 |
| 2. 天竜川上流域の立地と災害 | 北沢秋司著 |
| 3. 天竜川に於ける河川計画の歩み | 鈴木徳行著 |
| 4. 総合治水の思想 | 上條宏之著 |
| 5. 総合治水と森林と | 中野秀章著 |
| 6. 伊久間地先に於ける天竜川の変遷 | 松澤武著 |
| 7. 天竜峡で見た天竜川水位の変遷 | 今村真直著 |
| 8. 村境は不思議だ | 平沢清人著 |
| 9. 諏訪湖の富栄養化と生物群集の変遷 | 倉沢秀夫著 |
| 10. 諏訪湖の御神渡り | 米山啓一著 |
| 11. 理兵衛堤防 | 下平元護著 |
| 12. 近世 天竜川の治水 -伊那郡松島村- | 市川脩三著 |
| 13. 川筋の変遷 -天竜川と三峰川の場合- | 唐沢和雄著 |
| 14. 伊那谷山岳部の降雨特性 | 宮崎敏孝著 |
| 15. 天竜川の橋 | 日下部新一著 |
| 16. 伊東伝兵衛と伝兵衛五井 | 北原優美編 |
| 17. 天竜川の魚と虫たち | 橋爪寿門著 |
| 18. 天竜川のホタル | 勝野重美著 |
| 19. 天竜川流域の村々 | 松澤武著 |
| 20. 小渋川水系に生きる -人と水と土と木と- | 中村寿人著 |
| 21. ものがたり 理兵衛堤防 | 森岡忠一著 |
| 22. 量地指南に見る 江戸時代中期の測量術 | 吉澤孝和著 |
| 23. 土木技術と生物工学 -生きものを扱う技術- | 亀山章著 |
| | (以上既刊) |
| 24. 戦国時代の天竜川 | 笹本正治著 |
| 25. 天竜川の水運 | 日下部新一著 |
| 26. 惣兵衛川除 | 市村威人著 |
| 27. 講談 開墾堤防-下伊那郡豊丘村伴野- | 竹村浪の人著 |
| 28. 昭和36年伊那谷大水害の気象 | 奥田穰著 |
| | (発刊中) |